

ダブリン短期留学体験記

橋本ゼミ 4年

椿 夏葉

1: はじめに

2017年2月18日～4月17日の2か月間、私は語学留学のためダブリンを訪れた。ダブリンはアイルランドの首都で、国内政治経済の中心地である。私がこの町を留学先に決めた理由は2つある。1つは英語圏の中でも日本人留学生の数が少なく、ヨーロッパの中でも比較的治安の良い街であるため、留学先としては理想的な環境であったこと。もう1つは父方の祖父が生前、数年間をダブリンで過ごし、おそらく死ぬまでダブリンを愛していたことだ。祖父は気難しい人で、家族団欒といったものを苦手としていたため、私は祖父についてあまりたくさんを知らない。祖父がダブリンに居たことを知ったのも、彼の葬式の際、彼が遺影にとダブリンでの写真を遺していたからである。祖父の遺影を目にするたび、あの祖父が好んだ国へ足を運びたいという気持ちが募っていった。

大学内にはアイルランドへの短期留学プログラムが無かったため、豊島さんの紹介で「ネクシスジャパン」という会社に留学の斡旋をお願いした。大阪にある会社で、対応も非常に丁寧だった。運よくアイルランドにある語学学校の1つが授業料15%オフのキャンペーンを行っていたため、その資料を取り寄せ、1ヶ月ほどのやり取りの後、2016年末には予定が本格化していた。

留学直前は書類の申請や管理に追われたものの、自身がもうすぐアイルランドに行くのだという実感はあまり湧かなかった。飛行機に乗り込んだ後もそれは変わらず、私が留学を骨身に沁みて感じたのは寮に到着してからだった。

2: 寮生活

私が滞在していたのは「YWCA Dublin Residence」という学生向けの寮である。私のような語学学校の生徒だけでなく、ダブリン市内の大学生や専門学校生も利用していた。そのため面子の入れ替わりはあるものの、常に20人ほどの学生が滞在していた。基本的には相部屋で、男性利用者に比べて女性の割合の方が圧倒的に高かった。朝夕の食事付きで、ダブリン市内の中心地から徒歩15分ほどという好条件ゆえ、家賃は比較的高めに設定されていたものの、妥当な額の域を逸脱するほどではなかった。

私にとって初めての寮生活であったが、ホームステイではなく学生寮を選んだことは最良の選択であったと断言できる。それほどまでに、寮で過ごした時間は印象的なものだった。

2-1: 寮における交友関係

しかし正直なところ、最初の2日間の思い出は最悪だ。丸一日の長距離フライトに、初めての寮生活へのストレスで私は心身ともに絶不調だった。さらに困ったことに、私のルーム

メイトの **Paulina** は寮一番の変わり者で、感情の起伏が激しくコミュニケーションを取るのがなかなか難しいタイプの女性だった。ロシアから英文学を学ぶためにダブリンに来ていた彼女は、一日の大半をベッドの上でラップトップとにらめっこしながら、ファンタジーの世界を彷徨っていた。寮の他の住民ともほとんど交流せず、私も 2 日目には彼女を頼ることを諦めた。

よくあることだが、寮内では大まかに国ごとのコミュニティが形成されており、新しく来た住民は既存のコミュニティに所属するか、自身で新しいコミュニティを創設するかが常だった。私の場合、次に出会ったのがイタリア人で、その後 6 週間はイタリアンコミュニティに席を置くこととなった。最も長い時間を共に過ごした **Enrica** とは 3 日目の朝食の際に初めて話した。大学を卒業し、職探しのために英語力の向上を必要としていた彼女は、私と同じ日にダブリンに到着していた。エンターテイメントを好む彼女は、ほぼ毎日私を遊びに誘った。平日の夜はパブかクラブへ、週末は 1day ツアーで離れた観光地へ、といった具合に。

その後 **Enrica** の紹介でイタリア人の **Chiara**、**Carlotta**、**Gaia**、**Elena**、スペイン人の **Marina** に出会い、基本的に彼らと行動を共にした。ラテン系の彼らはよく話し、よく笑い、大人数で行動することを好んだ。時にそれは良くもあり悪くもありであったが、総評すると彼らと出会ったおかげで毎日全く退屈することが無かった。

イタリアンガールズが 3 月末に帰国した後は、スパニッシュコミュニティで 2 週間を過ごした。特に年長者で寮の中でも古株の **Marta** とは意気投合し、共に外出することは多くなかったものの、寮内でたくさん話をした。スペインの文化から、寮の住民に関する内緒話まで、彼女は私を笑わせる天才だった。**Enrica** や **Marta** といった特に仲良くしていた友人とは、帰国した今でも頻繁にメッセージのやり取りをしている。

2-2：寮における食生活

寮の友人らと顔を合わせるのには主に食事の場であった。朝は 7：30～10：00、夜は 18：00～19：00 の間に、寮のダイニングルームで食事を取ることができた。学生は冷蔵庫、電子レンジ、トースター以外の料理道具を使うことはできず、食事はすべてキッチンから配給された。キッチンを使用する事ができないのはおそらく食中毒対策のためと思われる。また、食事時間の間に食事を取ることができない場合は、アルミフォイルをもらって自分の分をダイニングテーブルに置くこともできた。

不満があるとすれば夕食の不味さである。これはアイルランド全体で言えることだが、毎晩ジャガイモと肉のオンパレード。野菜の少なさを嘆いた夜は数知れない。さらにアイルランドでは健康志向から塩分制限をかけており、出てくる料理に味がしないこともしばしばあった。幸いなことに各ダイニングテーブルの上には塩コショウが常備されており、ほとんどの学生はそれらを利用していた。しかし聞いた話によると、これでもここ数ヶ月でシェフが変わったことにより、以前よりも美味しくなったらしい。

夕食担当のシェフはイラン人男性のアリと、アイルランド人の女性の 2 人でシフトを組んでいた。アリが担当の夜は料理もアラビック風味で、しかも日によって味にむらがあった。油や香辛料の使用量が多く、ヨーロッパからの留学生たちには不評だった。私にとっては「もったいないから食べる」という程度の味だった。

個人的に最も衝撃的だった夕食は米のデザートである。水か牛乳を大量に加えて炊かれたであろう米にベリー類を加えて作ったデザートで、主食としての米に慣れた日本人にとっては奇妙という他なかった。私は一口で食べることをやめ、それ以来一度も口にすることは無かった。

3：学校生活

私が通っていた学校は「フランシスキング」というところで、元はロンドンに本校舎を構える語学学校である。ダブリン校は設立 3 年目の比較的新しい部類に入る。そのため教室は綺麗なものの、何故かトイレの数が少なく、特に女子トイレはボロボロでお世辞にも綺麗とは言い難かった。

クラスはレベルごとに A1 から C1 までに分けられており、各クラス平均して 13 人程度の生徒がいた。私は入学時の試験の結果、B1 クラスに振り分けられていた。多くの生徒は午前中のみ授業を受けていたが、私の場合は午後にも IELTS 対策の授業を受講していたため、平日は 9：00 から 15：30 まで学校で過ごした。

3-1：学校における交友関係

実のところ、アイルランドにはブラジルからの留学生が非常に多い。学校の生徒の半数はブラジル人で占められていた。ブラジル人に次いで多いのがイタリア人で、結局クラスメイトの大半はブラジル人とイタリア人であった。

語学学校の特徴は常にクラスメイトのメンツが変わることである。皆それぞれ受講期間が異なり、さらに月一回の校内試験でいい成績を出すことができれば上のクラスに移動できるからである。私も 2 か月間でブラジル人やイタリア人だけでなく、フランス人、韓国人、ウクライナ人、サウジアラビア人、ロシア人など、様々な国からのクラスメイトと出会った。

私のクラスは学校の中でもクラスメイト同士の仲が非常に良いクラスで、それには私も一役買った。というのも、学校生活 2 週目の頃に WhatsApp を使ってクラスグループを作成したのである。陽気な生徒が多かったことも幸いし、授業後もグループチャットを通じて彼らと交流することができた。これは互いの日常生活や考え方を理解するのに有効的で、時には彼らと図書館やレストラン、バーに赴くこともあった。

特に仲良くしていたのはブラジル人の Beatriz、Maria、イタリア人の Giulia、韓国人の Iseo である。彼女たちは陽気なものの勤勉で、踊りながら騒ぐことよりも、パブでゆるゆると酒を煽りつつ、各国の文化や出来事について話をするのを好んだ。彼女たちとの交流を

通じて、私もまたたくさんの議論を交わすことができた。自分にとっての常識が彼らを驚かせることもあり、逆もまた然りであった。例えば、日本において公共の場での痴漢は遍満している問題であるが、イタリアにおいてそれはあり得ないようだ。こういった話を、互いに英語の間違いを修正したり、語彙を補ったりしつつ話したことは、互いのスピーキング能力の向上にも貢献するため、非常に有益な時間であったように思われる。

3-2：先生について

学校という場において、最も重視すべきことの1つが教師の質である。私は3人の先生にお世話になっていた。午前中、文法と語彙のクラスを Yvonne に、プレゼンテーションのクラスを Ita に、午後の IELTS のクラスを Leni に見てもらっていた。Yvonne は B1 クラスの担任で、フランシスキングの中でも1、2を争う良い教師だった。授業は面白く、生徒に真摯に向き合う先生で、私含めほとんどのクラスメイトは彼女のことが大好きだった。彼女は常に私たちの英語力向上に努めた。特にありがたかったのが、たくさん出された宿題である。彼女の出す宿題のおかげで、アフタースクールがバブだけで終わらずに済んだと言っても過言ではない。

4月13日は Yvonne の誕生日で、この日はクラスメイト全員でサプライズパーティを企画した。各人が自身の国の食べ物を持ち寄り、休み時間に教室を飾りつけし、彼女を驚かせた。偶然、私にとってもこの日が最後の登校日であったこともあり、印象深い一日となった。

一方で Leni は学校でもワースト1位の教師だった。彼女はおしゃべりで友人としては面白いかもしれないが、計画的に授業をするということが無く、いつも行き当たりばったりだった。授業中に電話に出ることや、私用に席を外すこともしばしばで、私は何故彼女が教師を続けられているのか甚だ疑問であった。しかし、生徒の数の少ない午後は、クラスに選択肢がなく、私は2か月間彼女の授業に耐えなければならなかった。

3-3：スチューデントスタッフ制度

寮、学校共に採用していたのがスチューデントスタッフ制度である。この制度は住民や生徒がスタッフとして働く代わりに無料で寮や学校のサービスを受けられるというものだ。寮の場合は家賃が、学校の場合だと授業料が無料になる。私の滞在していた寮や学校には、意外にもたくさんのスチューデントスタッフがいた。これは画期的な制度のように思われる。スチューデントスタッフになるためには当然、相応の能力が求められるが、上手くやれば無料で学生生活を過ごしつつ、さらに英語力向上も図れるのである。

4：ダブリン

さて、ダブリンという街であるが、個人的な印象としては北海道に似たところであるように思われる。街の規模は小さく、買い物にせよ娯楽にせよ、大抵のことは街の中心地だけで事足りる。少しでも郊外に出ると一面に農場が広がり、他の街への移動手段としてはバスが

主流。歴史的に重要な建築物といったものほとんど無く、ガイドブックのメインページに大学が紹介されるような街、それがダブリンである。

4-1：交通網

ダブリン市内において交通の便はあまりよろしくない。歩いて1時間の距離をバスで50分といった始末。さらには日本と異なりバスが時間通りに来ないことなど常で、釣銭も出ない。3月末にはバス、市電、ダート（近郊電車）のすべてのドライバーが一斉にストライキを起こした。半日でストライキは解消されたものの、その日は多くの生徒、教職員が学校に来ることができなかった。

バスの形状はイギリスと同じ2階建てで、景色は良いがよく揺れる。幸いにも私は学校から徒歩15分の寮に住んでいたため、通学に公共交通機関を使用する必要性は無かったが、生徒の多くはバスや電車を利用していた。私の友人の一人は酔いやすいという理由でバスを嫌い、毎朝3キロの距離を歩いて通学していた。

しかしダブリンの公共交通機関は高齢者に対して良心的で、ある程度の年齢を過ぎると無料でバスや市電を使用する事ができる。

4-2：天候、食事

ダブリンを語るうえで欠かせないトピックが天候と食事である。常時曇天でありながら、時折気まぐれな雨が降るうえ、雨と共に強風が吹きつける、甚だ迷惑な空模様はアイルランドとイギリスならではだ。伝統的な天候は特に週末や祝日に大活躍で、アイリッシュは皆口をそろえて「**This is Irish typical weather!**」と言っていた。この伝統的な天気のおかげで、私の愛用していた折り畳み傘は早々にゴミ箱へ行く羽目になった。

しかし、緯度は高いが偏西風の影響から冬場でも雪が降ることは稀であるため、雨風さえなければ北海道より暖かかった。4月に入った後は小春日和が続き、過ごしやすい毎日だった。

食事については前述のとおり、主食はジャガイモと肉、名物料理はフィッシュアンドチップスと明らかに胃にやさしくないラインナップである。野菜が少ない原因は、おそらく気候のためだと思われる。実際、スーパーに並ぶ野菜の値段は高く、種類もあまり豊富とは言えなかった。一方で肉類の値段は驚くほど安く、そのためハムを軽食代わりに食べることもしばしばあった。

意外だったのは焼き菓子の美味しさである。カフェに入ると必ず置かれているクッキーとスコーンはホットチョコレートによく合い、私を幸せにしてくれた。特にラズベリースコーンとホワイトチョコレートクッキーは一押しだ。ダブリンではホットチョコレートにマシュマロを入れるのが主流で、ホットチョコレートをよりまるやかに仕立て上げていた。美味しいお菓子が無ければ私は早々にアジアマーケットに駆けこんでいたことだろう。

それでもこの数十年の間に外食産業の進出で料理の質はかなり改善されたらしい。実際、

滞在中何度かレストランにも足を運んだが、驚くほど不味いものに出会うということは無かった。しかし一番美味しいと思ったのはアイリッシュフードではなく、韓国人が経営する韓国料理店であった。

4-3：芸術、音楽

美術館、博物館について正直に言うと、アイルランドには素晴らしい美術館、博物館はない。滞在期間中、ほぼダブリン市内すべてのミュージアムをめぐったが、いずれも規模が小さく、刺激を受けるような作品はほぼなかった。国立コンサートホールに関しても、メインホールは小さく、アリーナの椅子は硬い木製で安っぽい印象を受けた。

そもそも、アイルランドには古典的に有名な画家、音楽家というものがほとんどいない。唯一フランシス・ベーコンくらいであるが、彼の国籍はイギリスにある。シティ・ギャラリーには彼のオリジナルアトリエが移築されており、これは一見の価値があるものだった。しかし展示作品については全体的にお粗末で、ナショナルギャラリーのカラヴァッジョ特別展で、カラヴァッジョの作品が3点しかないといった始末だった。

古典芸術がそのような様である一方で、ダブリンにおいて有名なのはストリートミュージックとアイリッシュダンスである。実は、世界的にも人気がある U2 やエンヤ、シネイド・オコナーといった歌手は皆アイルランド出身である。グラフトンストリートなどのメインストリートでは、昼夜問わずアマチュアバンドやシンガーソングライターたちが曲を奏で、夜毎パブではダンサーたちが踊りを披露していた。

アイリッシュダンスはケルト音楽と共に足だけで踊るアイルランドの伝統文化だ。セント・パトリックデーの前日、Yvonne が踊り方講座を開いてくれたものの、ことダンスに関して私は非常に鈍くさいため、残念ながら全くマスターできなかった。Giulia は軽々とマスターし、時折教室でもステップを踏んでいた。

アイルランドとは関わりないものの、運よく世界的なマンドリン奏者、クリス・シーリのコンサートを聴きに行くことができた。友達を誘ったものの誰も興味を示してくれず、そもそもマンドリンという楽器を知らないという有様だったので、これについては珍しく一人で国立コンサートホールに訪れた。彼の超絶技巧も素晴らしかったが、意外にもウィットに富んだジョークを言える人で、そこも印象的だった。残念ながらバッハは演奏されず、フォークソングが主だったが、どれも素晴らしい曲で満足はいく2時間であった。実際、YouTube で有名曲を聴いたことしかなかったので、帰国後 TSUTAYA で CD を探そうと思った。

4-4：パブ、バー、ディスコクラブ

ダブリンの夜はパブかバーかディスコクラブで過ごすものらしい。特にディスコクラブに関しては、私にとって映画の中だけの世界であり、実際に足を踏み入れるのは初めての体験だった。私が訪れたクラブは「Dicey's Garden」と「Howl at the Moon」の二軒で、いずれも学生に人気のクラブだった。何故か水曜日はビールが安くなるので、ほとんどの学生は

水曜日か金曜日の夜に利用していた。

ディスコクラブへ行ってみてわかったことは、ここは若い男女が火遊びか憂さ晴らしで来るところであるということだった。安い酒、狭いダンスホールに密集して文字通り踊り狂う人々、相手の耳元まで顔を寄せないと話すこともままならないほど大音量で流れる音楽が、ディスコクラブのすべてだった。古い洋画の中で主人公がディスコクラブに行き、そこで何故か突然恋に落ちるといったシーンがよくあるが、なるほどこういうことかと納得した。皆トランス状態だから潰れるか恋するかしか選択肢がないのである。実際、ブラジル人の友人は全く知らない男と突然キスをしていた。申し訳ないが私にはできない芸当であった。

パブやバーはディスコクラブとは異なり、席に座って酒を楽しむことができる。音楽もディスコミュージックより落ち着いた雰囲気のものを選曲されていた。私も私の友人も、ディスコクラブよりパブやバーを好み、ガイドブック片手にたくさんの有名パブを渡り歩いた。

パブは日本の居酒屋と違い、ビール 1 杯で何時間でも居座ることができる。私はいつもアイリッシュコーヒーか「Kapperberg」、またはカクテルを混ぜたギネスビールかといういずれも甘い酒を注文していた。結局最後までカクテルを混ぜたギネスビールの名称を覚えることができず、注文の度「甘いギネスください!!」という羽目になった。今でも思い出せないが、個人的には最も美味しいギネスビールの飲み方であると確信している。

アイリッシュコーヒーはコーヒーに数滴のアイリッシュウイスキーを混ぜたもので、店によってその分量が異なるため、毎度全く違う味のものが楽しめた。「Kapperberg」は日本で言うところのチューハイで、柑橘系とイチゴの 2 種類から味を選択できた。日本では販売されていないそうで、ダブリンで出会った日本人留学生の一人は、お土産にと「Kapperberg」をスーツケースに詰めていた。

4-5 : ホームレス、ドラッグ

ダブリンを歩いていて驚くのがホームレスの多さである。ヨーロッパの中でも税金の安いアイルランドは、Facebook などの有名企業も本部をダブリン市内に構えており、実は経済的には上向きである。ゆえに自国が経済的に不安定なブラジルやイタリアからの留学生の何割かはより良い職を求めてアイルランドに永住を希望するほどである。それにも関わらず、街中には路上生活者が非常に多く、さらに一見したところ若いホームレスが多いのである。これは興味深い状況で、イタリア人たちも不思議がっていた。

一つの理由はおそらくホームレスに対する支援の充実にある。ダブリンでは頻りに炊き出しや見回りなどの公的援助活動が行われており、そのために市内数カ所で連日の募金活動がなされていた。さらに公的支援だけでなく、道行く人もホームレスに声をかけては小銭を与えるのである。これにはとても驚いた。ホームレスを忌避しがちな日本人とは大違いである。カトリックの教えに基づく国民性なのではないかと考える。しかし、こうした支援ゆえに路上生活を続けることができるというのでは、本末転倒なのではないかとも思われた。

また他の理由として、ダブリン市内でドラッグが横行していることも関係しているよう

だ。私が直接目にすることはなかったが、一部のパブやディスコクラブはドラッグ市場の根城らしいという噂をよく耳にした。実際、クラスメイトの一人はドラッグの購入を勧められたという。治安が良いとは言っても、気が抜けないなと実感した。

4-6：買い物

ダブリン市内において、食べ物を買うには「TESCO」が便利で、世界的にも展開している「SPAR」よりも安く、品揃えも良い。その他日用品は「Euro Giant Discount Store」が便利で、日本で言うところの 100 均のような店だ。コンビニエンスストアのように 24 時間 365 日展開している店はなく、基本的にどこも平日 22 時には閉店し、土日の営業時間は短めなので要注意。

お土産を買うには Grafton Street か O'Connell Street を散策するのが一般的で、より安価なものを求めるならば「CARROLLS」が最適で、緑一色の外装が目印だ。お菓子、アクセサリー、T シャツ、マグカップなど、定番のお土産がすべて揃っている。なお、ダブリン空港のショップはあまり品揃えが良くないため、土産物は市内で購入することをお勧めする。

女性に人気なのが「Penney's」というファッション店で、驚くほど安価で服を買うことができる。この店について語る際、発音が悪いと大変なことになる。安かろう悪かろうの典型のような店なので、ここで買い物をする際はよく考える必要がある。

5：観光

Enrica と出会ってからというもの、天気如何に関わらず、ほぼすべての週末は観光地を巡る 1day ツアーに参加していた。アイルランドは全体の国土が小さく、バスに乗って数時間で西の端の街ダブリンから東の端、南の端、北の端どこへでも行く事ができる。ツーリストオフィスを頼るとバスツアーでもかなり高額なものを紹介されるので、私たちは語学学校が企画する学生向けのツアーに参加していた。

5-1：キルケニー、グレンダロッホ

2 月 25 日、最初の週末に Enrica に連れられて行ったのがキルケニーとグレンダロッホだ。キルケニーは「大理石の都市」と呼ばれ、キルケニー城や聖カニス大聖堂で有名である。グレンダロッホは初期のキリスト教会遺跡群で、石造りの大聖堂や複数の教会の跡地から構成されている。歴史的には 6 世紀ごろ、アイルランドの伝説的な聖人である聖ケヴィンによって開かれたそうだ。

このツアーで Carlotta とは初めて出会った。というのも、このツアーは彼女の学校が主催しているものであったのだ。彼女とは座席が隣であったこともありすぐに仲良くなった。しかしバスの運転が非常に荒く、話しながらも終始車酔いを押さえつけることになった。

またこの日の天候は一段と典型的で、残念ながら街を十分に楽しめたとはいえなかった。

5-2：モハーの断崖

3月11日、Enrica とフランス人の Anissa と訪れたアイルランド有数の観光スポットがモハーの断崖だ。両脇に果てしなく広がる切り立った崖の姿は圧巻の一言に尽きる。幸運なことに天気も良く、美しいパノラマ風景を堪能することができた。柵はあるものの簡単に越えられるため、多くの観光客は崖の縁まで行って写真を撮っていた。時間と体力さえあれば崖に沿ってどこまでも歩けるようだが、私たちの場合時間が限られていたため、惜しみながら帰宅した。

5-3：北アイルランド（ベルファスト、ジャイアント・コーズウェイ）

3月26日、やはり Enrica と訪れたのが北アイルランドである。ジャイアント・コーズウェイは北アイルランドに位置する世界遺産で、世界最高峰の柱状節理群は見ものである。幸いこの日も天候に恵まれ、一面に広がる円柱の上を渡り歩くことができた。海岸線にあることも、この景観を幻想的なものにしていて。

ベルファストはスコットランド、ウェールズ、イングランドとともに、イギリスを構成する四地方の一つである。日曜日の夕方に訪れたせいかほとんどの店は営業時間外で、街全体が寂寞としていた。住民とは少ししか話すこともなかったが、話すことと冗談が好きでいつも笑顔なアイリッシュに比べると、排他的で頑固な印象を受けた。例えば、私たちが飲み水を買おうとコンビニのようなスーパーに入った際、彼らは500mlの水を1ダース単位でしか販売してくれず、1本ずつ買いたいと言っても煩わし気に追い返されただけだった。おかげで Enrica のベルファストに対する印象は急降下した。

歴史的な観点からすると、ベルファスト含む北アイルランドは独立問題で政治的不安を抱えており、数十年前には北アイルランド紛争にまで発展し多くの死者が出た。今もベルファストの一部の家屋には「Murals」と呼ばれる宗教色、政治色の強い壁画が多く残っている。

ベルファストにはほんの2時間ほどしか滞在できなかったが、長期間居座ることができたなら、もっと様々な視点からこの街を見つめることができたのかもしれない。

5-4：タラの丘、ニューグレンジ

4月8日、珍しく日本人留学生ばかりで訪れたのがタラの丘とニューグレンジだ。いずれも有名な場所のはずなのだが、何故か欧米からの留学生の中では知名度が低く、興味も示されなかった。

タラの丘はケルト以前にアイルランドにおける伝説上の国が存在した地で、何らかの聖域であったと考えられている。立石とハイクロスがある以外は普通の丘なので、アイリッシュの少年たちと共に、丘の上から寝転んで転がり落ちるという遊びをした。

ニューグレンジは世界的にも有名な先史時代の遺跡の1つであり、その歴史は約5000年

前にまで遡る。考古学的にも、これが祭壇なのか墳墓なのか結論は出されていない。出入口の彫刻が施された巨石は人の出入りを制限する目的があったと考えられ、中の通路も非常に狭い。一定の条件が揃うと細い通路を通過して遺跡の中に光が差し込むようになっているらしい。なんだかわからないというところにロマンが詰まっていると感じた。

5-5：マラハイド

4月14日、イースターホリデーを利用してブラジル人の友人と訪れたのがダブリン近郊の街マラハイドである。マラハイド城とその周辺を取り囲む庭園が有名であるが、残念ながら天候不順で楽しむことはできなかった。夏本番に差し掛かる前に行くといいのかもしれない。

5-6：ダブリン市内

有名なダブリン動物園とギネスファクトリー以外、ほとんどの観光名所には足を運んだ。中でもトリニティ・カレッジの図書館と、キルメイナム刑務所は素晴らしかった。トリニティ・カレッジはアイルランドの名門大学で、そのオールドライブラリーはハリーポッターの撮影にも使われた場所として人気がある。両側に立ち並ぶ巨大な本棚にぎっしりと詰まった古書の醸し出す雰囲気には、時間を忘れさせるような魅力があった。

キルメイナム刑務所はイギリス支配に対する抵抗運動の際、多くのアイリッシュが投獄、処刑された場所で、現在は博物館となっている。予約必須のガイドツアーでしか中に入ることが許されないのだが、案内人がアイリッシュであったこと、時間制限が厳しく終始早口で話していたこと、政治に関する専門的な語彙が多かったことなどから、解説を聞き取ることができなかった。しかし前日に友人と、キルメイナム刑務所も利用して撮影された「麦の穂をゆらす風」という映画を観ていたので、大まかな内容は予想することができたので良かったと思う。

ダブリン城はマーライオン並みのがっかり具合で、運良く入場無料の日に入れたからよかったものの、もしお金を払っていたら後悔していただろう。フェニックスパークは野生のシカが有名で、奈良公園のような場所だ。天気の良い日にサイクリングをするのにはもってこいだが、アイルランドにおいてサイクリング日和に恵まれるのはなかなか難しいだろう。私が行った際も、レンタサイクルを漕ぎ始めた途端雨が降り始めるという悲劇であった。

6：トラブル

留学中の最大のトラブルは、3月19日に突然、私のスマホが使えなくなってしまったことだ。留学前、私は留学先でSIMカードを利用しようとドコモショップに行ったのだが、日本においてiPhone5シリーズ以前のモデルはSIMロックを解除することができないと言われた。そのためダブリンではスマホを常時フライトモードに設定し、Wi-Fi環境下でのみ使用していたのだが、その結果、1ヶ月が経った時点でappleが安全対策にとアクティベー

ジョンロックを掛けてきたのだ。当然普段使用しない ID とパスワードなど覚えているはずもなく、私のスマホは沈黙した。

当初、私は状況を甘く見ており、apple のショップに行けば直してもらえらるだろうと高を括っていた。しかし実際は、セキュリティの問題となるとショップ店員は何もできず、apple care の番号を紹介されたただけだった。寮のスタッフから電話を借りてかけてみたものの、アイルランドの apple care にできることは何もなく万事休すかと思われた。

週明け、語学学校の固定電話を借りて日本の両親に事情を話すことができた。我ながらよく母親の携帯番号を思い出せたものだと思う。その後日本の apple care との 3 日に渡るやり取りの末、なんとか ID を再発行し、アクティベーションロックを解除することができた。

状況としては散々な数日間であったが、その間寮でも学校でも多くの友達が親身になって協力してくれたことが本当にありがたかった。万一デジタルデトックスを実施する羽目になっていたとしても、それはそれで楽しく過ごせていたのかもしれない。

7: イタリア旅行

実は 3 月 31 日から 4 月 2 日の 3 日間、Enrica を頼ってミラノへ小旅行に行ってきた。この日程を選んだのは Enrica が語学学校を修了し、イタリアへ帰国する日だったからである。

7-1: フライト

ダブリンからイタリアへは飛行機で 2 時間ほどである。航空券はアイルランドの格安航空会社であるライアンエアーで購入した。この会社はヨーロッパにおける格安航空会社の中でも有名企業の一角を担っており、国際旅客数としては世界最大であるらしい。特にダブリンからロンドンへはたったの 30 ユーロという破格さで、多くの学生たちが週末をロンドンで過ごしていた。私自身、イタリア旅行がなければロンドンへ足を運んでいたことだろう。

しかしこの会社、EU 以外に国籍を置く者にとっては少し不親切だ。例えば搭乗券について、EU 国籍の人々はオンラインチェックインの後、アプリからスマホに搭乗券の QR コードを取得できる。それに対し、EU 国籍以外の人々は公式サイトから自身のメールアドレスに搭乗券のデータをダウンロードし、それをプリントアウトして空港まで持参しなければならない。さらに空港に到着した後も、荷物の有無に関わらず、チェックインカウンターで判子をもらってからでないとは保安検査場を通過することができない。もし今後ライアンエアーを使用するようなことがあれば、余裕を持って準備することをお勧めしたい。

7-2: ミラノ

旅行中はミラノ市内にある Enrica の実家にお邪魔させていただいた。彼女の両親は優しい人々で、英語は話せないものの一生懸命コミュニケーションを取ろうとしてくれたのがありがたかった。日曜日には Enrica が本場のカルボナーラを振る舞ってくれ、グリッシー

ニやプロシュートと共に家のベランダで太陽の恵みを感じながら取った昼食は最高だった。

土曜日の日中は Chiara が市内の観光スポットを案内してくれた。ドゥオーモに始まり、ガレリア、スカラ座、スフォルツェスコ城を順にめぐり、「Luini」という有名な店で少し変わった形状のピザのようなものを食べた。「Luini」の向かいにあるジェラートも一品で、流石はイタリア、何を食べても美味しいと感激した。街を散策中、偶然ゲイカップルの結婚式を見ることができた。イタリアはカトリックの国ではあるが、数年前から同性婚も合法化され、教会以外であれば挙式も可能であるようだ。Chiara も実際に結婚式を見たのは初めてとのことで、お互いに珍しい体験ができた。

夜は Carlotta や Enrica の地元の友達とも合流し、大勢で真夜中まで楽しい時間を過ごした。ミラノのレストランは高いと聞いていたが、地元の子たちは穴場を知っていたのでお手頃に美味しい夕食を食べることができた。しかし勧められて飲んだスピリットはあまり私の口に合わず、お酒に関してはダブリンが恋しくなった。

日曜日、午前中に一度ブレラ美術館を訪れたものの、各月第一日曜日は入館無料日のため入口で大行列ができており中に入るのは諦めて帰宅した。午後からは Chiara、Enrica と共に新市街や高級住宅街の方を散策した。土曜日に訪れた旧市街とは全く異なる雰囲気でも興味深かった。ちょうど翌週にミラノファッションデザインウィークを控えていたということもあり、街中に奇妙なモニュメントのようなものが散在していた。素人目に見ても素晴らしいと思う作品もあれば、なるほどわからんとしか言いようもないものまで、様々な作品があり、確かにミラノはデザインの街なのだ実感した。

夕方、帰りがけに Enrica の家族がお土産にとパルミジャーノチーズを持たせてくれた。次は日本で会うことを約束し、私はダブリンに戻っていった。初めてのイタリアの記憶は、たくさんの美味しいものと友達の笑顔で満たされたものとなった。

8：おわりに

アイルランドで過ごした 2 ヶ月間は本当に素晴らしい毎日で、一日たりとも暇を持て余すことがなかった。世界中のあちこちからやってきた多種多様な文化や価値観を持つ人々と触れ合ったことは、私の視野を大きく広げてくれた。特に印象的だったのは、ヨーロッパの人々との家族に対する価値観の違いである。彼らは家族というものをとても大切にする。毎日決まった時間に電話をかけ、長期休暇には必ず帰省し、誕生日などの祝い事には親戚一同集まってお祝いをする。近年の核家族型の日本社会とはかなり異なる文化だなと感じた。

ダブリンでの生活で一つ残念だったことは、結局祖父の記録を見つけることができなかったことだ。祖父が滞在していた 4、50 年前はまだインターネットも普及しておらず、また私が祖父の正確な滞在年月日を知らないということもあり、祖父について知ることはできなかった。

しかし、8 週間を過ごしたことで私もまた祖父同様にダブリンという街をとっても好きにな

った。また英語についても、日本にいる間は勉強することが煩わしく最も苦手な科目であったが、より多くの人とコミュニケーションを取るために英語は便利で使いやすい言語であることを体感した。この発見は、今後英語を勉強することに対するモチベーションとして私を支えてくれるだろう。